

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

宮城県柴田郡柴田町

○学校名

柴田町立船迫中学校

○学校のURL

<http://www.funaba-j.myswan.ne.jp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各2学級、【特別支援学級】2学級、【合計】8学級

○児童生徒数

【全生徒数】219人（平成25年11月1日現在）

（内訳：1年生66人、2年生80人、3年生73人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

健康で、豊かな情操と道徳性をもち、創造力に富む生徒の育成

【人権教育に関する目標】

（1）人間尊重の理念を持たせる。

（2）生徒の思いやる心を育むための環境（物的環境・活動環境・人的環境）を整備する。

（3）差別・いじめ等については、解決に向けて徹底して取り組む。

○人権教育にかかる取組の全体概要

- 3V絆プロジェクトによる、被災地支援活動、ボランティア活動を通じた思いやりの醸成。
- MAP（みやぎ・アドベンチャー・プログラム）的手法を活用したGタイムの実施やあいさつ運動の励行により、よりよい人間関係づくりを目指す。
- PDCAサイクルを意識した話し合いによる、生徒の自浄作用を高める活動の推進。
- 学校ボランティア、地域のゲストティーチャー、町外地域の方々の協力による協働教育、みやぎの志教育の推進。
- ラベンダーの香りただよう学校づくりに向け、ラベンダーの植栽作業を通じた勤労・奉仕の心の育成。

3. 特色ある実践事例の内容

『3V絆プロジェクト～被災地の学校が行う被災地支援活動～』

○取組のねらい、目的

- (1) 生徒が被災地に出向き、花木の植栽、美化清掃、慰問演奏などの支援活動を行うことで、被災された皆さんに潤いのある生活を取り戻していただくことの大切さを実感させ、かつ、ボランティアの意義を考えさせる。
- (2) 津波の被害を受けた場所に実際に足を運び、災害の恐ろしさを体感するとともに、現地に暮らす人々の話を聞くことで、今後の復興の担い手としての意識を高める。

○取組を始めたきっかけ

平成23年3月11日、東日本大震災が発生。私たちはこれまでに例を見ない、地震・津波の被害に遭いました。幸い、本校は被害も少なく、約1か月後には学校を再開することができました。しかし、沿岸部では家を失い、家族を失い、町の復旧もままならない状況にありました。そこで、同じ宮城県民として、苦しんでいる人たちに何かできないかという思いから、「3V絆プロジェクト」が始まりました。

まず、校長と親交のあった女川中学校からの要請で清掃用の雑巾を贈ることにしました。その際、生徒が雑巾を縫うに当たり、以前から交流のあった地域の老人会の方を指導者としてお招きし生徒に指導していただきました。その老人会と保護者にも寄附していただき、5月下旬には1200枚の雑巾を提供することができました。

次に、吹奏楽部が学区内の保養施設に一時避難している方々のために、慰問演奏会を行いました。その後、吹奏楽部顧問の出身地である気仙沼への支援を計画し、有志の方々の資金の援助を受け、9月に気仙沼市の避難所で慰問演奏会を行いました。

このような活動をとおして、生徒たちの中に被災地を支援しようという気持ちが芽生えてきました。少しでも被災地の方々の力になりたいという心を育て、やがては、宮城の復興を担う大人になってほしいという願いも込めて、この活動を継続して行うことにしました。

※「3V」とは、本校開校当時から伝わる生徒活動スローガンで、「【Vision】(夢)をもち、【Victory】(勝利)を目指す、【Vitality】(活力)ある生徒」から名付けられたもので、「3V精神」として今も伝えられているものです。

○取組の内容

(1) 活動の概要

平成23年度から始まった本校の被災地支援活動を、年度、活動内容、活動に携わった生徒、対象地域、活動に協力していただいた団体や資金提供を受けた団体と

いう項目でまとめると以下ようになります。(企業名や団体名、個人の名称などは記載を控えさせていただきます。)

【これまでの活動の経緯】

年度	活動内容	活動生徒	対象地域	協力団体等
23	「雑巾を縫って被災地に贈ろう」	全校生徒	女川町 女川中学校	町内老人会 保護者
	「避難所で慰問演奏会をしよう」	吹奏楽部員	学区内避難所の方々 (宮城県山元町磯地区の住民)	学区内保養施設 保護者
	「被災地で慰問演奏会をしよう」	吹奏楽部員	気仙沼市唐桑地区の避難されている住民	唐桑地区ディサービスセンター 本校PTA会長 有志の方々
24	「被災地に花を咲かせよう」 プランターに花の苗を植えて女川町の各所に設置	全校生徒のうち希望者 48名	女川町 女川中学校 女川小学校 希望の鐘仮設商店街 野の浜仮設住宅	外資系企業 本校PTA 女川中学校 角田市の育苗造園会社
	「被災地で慰問演奏会をしよう」	吹奏楽部員	気仙沼市唐桑地区の避難されている住民	外資系企業 唐桑地区ディサービスセンター 本校PTA、保護者
25	「山元町の仮設住宅にラベンダーを贈ろう」 被災地を見学し被災体験談を聞いて、仮設住宅でラベンダーの植栽と美化活動を行う	2学年全員 80名	山元町磯区の住民 山元町坂元中山熊野堂仮設住宅の住民	NPO法人 柴田町教育委員会 山元町教育委員会 坂元生涯学習センター前・現磯区区长 仮設住宅行政連絡員 学校支援ボランティア (ラベンダーの指導) 前中浜小学校勤務教諭 (現船迫小学校教諭)
	「山元町の方々を文化祭に招待しよう」 仮設住宅の方を招き、発表見学を通し交流を深める	全校生徒	山元町磯地区の住民 中山熊野堂仮設住宅の住民	山元町教育委員会 柴田町教育委員会 柴田町の保養施設前・現磯区区长 仮設住宅行政連絡員 柴田町の有志の方々

※平成25年度の活動は3年計画の1年目にあたります。今後、同じような支援を少なくとも2年間は続けていく計画です。

(2) 今年度の取組

①山元町の仮設住宅にラベンダーを贈ろう（実施日：平成25年7月2日）

ア) 今年度、山元町で被災地支援活動を行うことにした経緯

2年間に渡り、企業の資金提供もあり、女川町と気仙沼市という遠方での活動ができました。この間の活動は、特定の部活動の生徒や希望者を募っての活動でした。このときの活動のようすは、新聞やテレビニュースに取り上げられ、生徒も自分たちの活動に自信と誇りを持ち、まさに、心の教育そのものであると認められる状況にありました。この有意義な活動を今後も継続して行うべきであると考え、今年度は、被災地支援活動を心の教育と防災教育の面から教育課程に位置づけました。

実際に活動を計画する段階で、対象地域を山元町としました。山元町磯区の皆さんは、震災直後、本校学区内の保養施設で3ヶ月ほど避難生活を送られ、その間、本校吹奏楽部が慰問演奏会に訪れたことがあり、少なからず縁があったこと、そして、女川町や気仙沼市に比べ本校から近いことから支援活動の場として考えました。

イ) 被災地支援活動を実現化するための準備

この支援活動を実現するために、柴田町教育委員会と山元町教育委員会に計画の概要を説明し協力を要請しました。特に、生涯学習課の職員（派遣社会教育主事）の方には、計画段階から関わっていただき、被災地や仮設住宅の案内、磯区の方との繋ぎや打合せ会の設定など全面的に協力してもらいました。

次に、活動内容が被災地の方に受け入れていただけるか、磯区区長と仮設住宅の代表者（行政連絡員）と話し合いました。このとき決定した主な活動内容は次のとおりです。

- ・柴田町で行っている「フラワースクール事業」で、生徒が1年生の時に挿し木して学校で育てたラベンダーの苗を鉢植えにし、地区の人々をつなぐ絆の花として仮設住宅に住んでいる磯区の皆さんや小中学校、公民館に贈る。

- ・津波の被害で破壊された小学校の校舎を見学させてもらう。当時勤務していた小学校の先生（現在、学区内の小学校に



山元町教育委員会の方々
(後方が被災した小学校)

勤務。生徒が6年生だったときの担任でもある。)に被災当時のようすを聞く。

- ・見学前に、近くに建立された慰霊碑前で鎮魂の式を行う。
- ・磯区区長さんから、津波体験と現在の復興のようすなどを話していただく。
- ・仮設住宅の環境美化のためのボランティア活動を行う。
- ・文化祭(10月19日)に仮設住宅の方を招待し、交流を深める。

ウ) 活動資金の調達

活動内容が具体化したところで、資金の協力をNPO法人に依頼しました。応募後、活動内容が採用され、交通費や活動のための道具の購入のめどが立ちました。さらに、本校の活動を知った柴田町の有志の方々から資金提供の話がありご寄付いただきました。また、ラベンダーの植え替え作業は、学校支援ボランティアの方に現地までご足労願ひ、直接生徒の指導に当たっていただきました。



仮設住宅の窓ふきをする
船迫中学校の生徒

このようにして、多方面の方の協力をいただきながら、無事に被災地支援活動を行うことができました。

②山元町の方々を文化祭に招待しよう(実施日:平成25年10月19日)

ア) 文化祭への招待を計画した経緯

今年度の被災地支援活動を計画するに当たり、今後は支援対象を変えずに継続して実施することを校内で確認しました。そこで、磯区の方々と生徒の交流を深めることも絆を強くする大切なことだと考えました。また、以前、避難生活を送られていた町を再び訪れ、そこで学ぶ中学生の活動を見ていただくことは被災された方々を元気づけることになるのではと考え、本校の文化祭への招待を計画しました。

イ) 文化祭での交流のための準備

実施までの準備として、山元町教育委員会にお知らせするとともに、磯区区長さんと仮設住宅の代表の方に招待状(生徒会長からの手紙)と参加申込書を全戸に配布していただきました。送迎のための輸送費等については、柴田町の有志の方々からの寄付で賄いました。さらに、磯区の方々から避難生活を送っていた保養施設を再び訪れたいとの希望がありましたので、その趣旨を柴田町教育委員会に伝えたところ、全面的な協力をいただけることになりました。

ウ) 文化祭当日の活動

当日は、生徒が手作りしたラベンダーのにおい袋の贈呈、7月の被災地支援活動報告の発表、吹奏楽部の演奏、本校生徒による生徒作



文化祭で生徒製作のラベンダーのにおい袋を贈る

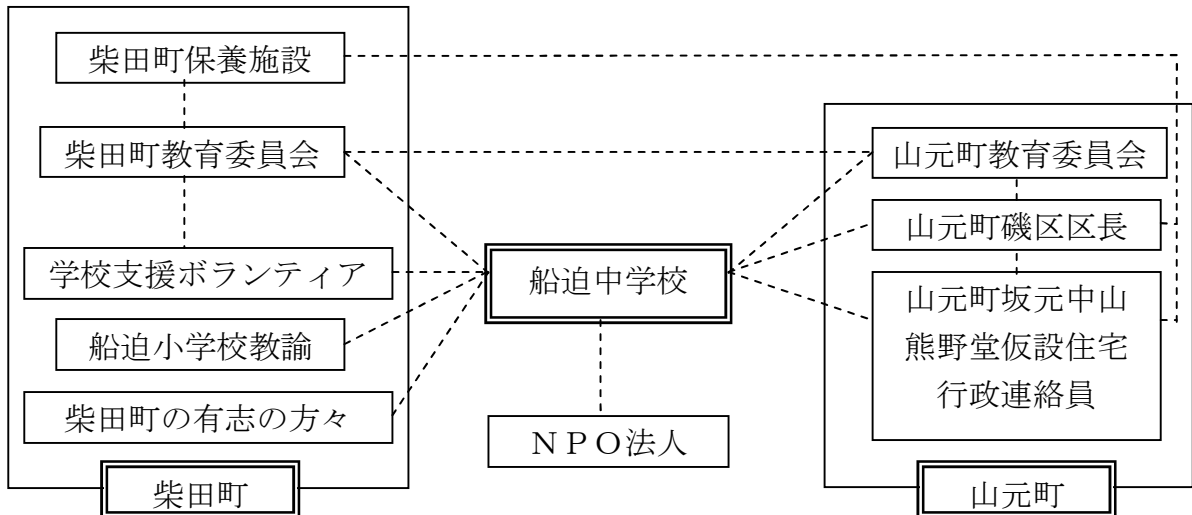
品展示教室のご案内など磯区の方との交流の
時間を持ちました。

③ 3V絆プロジェクトの実際

平成 25 年度 3V 絆プロジェクト I	平成 25 年度 3V 絆プロジェクト II
<p>1 ねらい</p> <p>(1) 被災地に、技術科の時間に挿し木したラベンダーや家庭科の時間に制作したラベンダーのにおい袋を贈ったり、美化活動を行ったりすることにより、少しでも潤いのある生活を取り戻していただくことの大切さを実感し、ボランティアの意義を考える。</p> <p>(2) 実際に被害のあった場所に行き、現地に暮らす人々の話を聴くことによって、災害の恐ろしさを体感するとともに、今後の復興の担い手としての意識を高める。</p> <p>2 支援先 宮城県山元町磯区の人達</p> <p>3 期 日 平成 25 年 7 月 2 日 (火)</p> <p>4 参加生徒 柴田町立船迫中学校第 2 学年生徒 80 名</p> <p>5 引率者 船迫中学校 教師と保護者 10 名程度</p> <p>6 日 程 (行動予定)</p> <p>9:00 船迫中学校出発 (貸し切りバス 2 台)</p> <p>10:00 中浜小学校到着 ○鎮魂式 (慰霊碑に献花) ○被災地学習 1 「中浜小学校の校舎見学」</p> <p>11:00 中浜小学校出発</p> <p>11:15 坂元公民館到着 ○被災地学習 2 「私の震災体験」講話</p> <p>12:15 昼食 (弁当配布)・休憩</p> <p>13:00 坂元公民館出発</p> <p>13:15 中山熊野堂仮設住宅到着 ○ラベンダーの植え替え作業 ○窓ふき清掃ボランティア活動</p> <p>15:30 山元町出発</p> <p>16:30 船迫中学校着・解散</p>	<p>1 ねらい</p> <p>(1) 7 月に行った、3V 絆プロジェクト I で作った絆をより強いものにするため、山元町の人々を本校の文化祭にご招待し、交流を持つ。</p> <p>(2) 文化祭での生徒の活動を山元町の人々に見て頂くことにより、親睦を深めるとともに、生徒からの発表を通して、ボランティア活動の意義について全校生徒の意識を高める。</p> <p>2 支援対象 宮城県山元町磯地区の人達</p> <p>3 期 日 平成 25 年 10 月 19 日 (土)</p> <p>4 参 加 宮城県山元町磯地区の人達 20 名</p> <p>5 接待・お世話役 船迫中学校教師</p> <p>6 日 程 (行動予定)</p> <p>10:00 山元町中山熊野堂地区仮設住宅出発 (貸し切りバス 1 台)</p> <p>10:50 船迫中学校到着</p> <p>11:00 船迫中学校文化祭見学 ご招待者等の紹介、ごあいさつ等のセレモニー、および、生徒発表の見学</p> <p>*ここで、ラベンダーのポプリ等、生徒作品を贈呈。</p> <p>11:00 3V 絆プロジェクト発表・報告会</p> <p>11:20 吹奏楽部演奏</p> <p>12:00 発表終了・校内展示見学等</p> <p>12:30 学校出発</p> <p>12:40 保養施設到着 昼食・休憩 *昼食場所は、以前避難先となっていた保養施設</p> <p>13:30 保養施設出発</p> <p>14:30 山元町中山熊野堂地区仮設住宅到着</p>

○取組の主体や実施体制

「3V 絆プロジェクト」に関わった諸団体と本校との関係。(25 年度)



○取組を実現するにあたって課題となったこと、及びそれに対して講じた工夫

(1) 実施上の課題

①被災地の方々のニーズに合った被災地支援活動が計画できるか。

被災地支援活動の内容が、こちらからの一方的な押し付けにならないようにしなければならない。

②より効果的な活動を行うための人的な配置は可能か。

被災地のようすを知っている方、仮設住宅の皆さんを取りまとめる方、支

援活動の補助をしていただく方など多くの人手が必要であり、また、本校の教員だけではカバーしきれない部分も多々ある。

- ③生徒が被災地支援活動を通して感じたことを志まで高められるか。

支援活動実施後に達成感を持たせるだけでなく、将来にわたって宮城の復興を支える大人でありたいという気持ちまで高められるか。

- ④被災地支援活動のための資金を調達できるか。

生徒のボランティア活動を積極的に支援していただける団体や機関が見つかるか。

(2) 課題解決に向けた工夫

- ①被災者の皆さんからの聞き取りと活動内容のコーディネート

被災地支援活動が被災者の皆さんのニーズに合ったものにコーディネートするため、磯区区長さん、仮設住宅の代表の方、山元町教育委員会の職員の方と数回にわたって打ち合わせを行いました。まずは、現地を訪れ被災地のようすを山元町教育委員会の職員の方の案内で見学させていただきました。また、磯区の皆さんの現在のようすや居住地、仮設住宅の住民のようす等をリサーチしていきました。これらの情報を総合し、今年度のボランティア活動では、仮設住宅には高齢者の方が多いということから、窓ふき清掃を行うことにしました。

- ②協働教育を意識した人的な配置と協力要請

被災地支援活動をより効果的に行うためには、現地を訪れた際に震災の状況や被災者の皆さんの現状を説明していただくことが必要であろうと考えました。そこで、協働教育の観点から、被災した小学校の見学説明を山元町教育委員会の職員の方と小学校教諭に、被災体験談を磯区区長さんに、仮設住宅でのボランティア活動について仮設住宅代表の方に、ラベンダーの植え替え指導を学校支援ボランティアにお願いするなど、多くの方の手を借りて活動を行いました。

- ③体験を志まで高めるための取組

被災地支援活動を単なる体験で終わらせることなく、将来、宮城の復興を担う一員としての自覚と志をもった生徒の育成にするために、生徒たちに自分たちにできることの範囲内で被災地の皆さんのためになることを考えさせ自主的な活動を促しました。活動後は、振り返りの時間を確保し、自分たちの活動の意義や後輩に伝えたい改善点等を考えさせました。特に、もっとこうすればよかったという点を考えさせることを重視しました。

- ④活動資金の調達のために

昨年度の活動には企業からの資金提供があったので遠方での活動が可能でした。しかし、今年度はそれもなくなり思案していたところ、NPO法人が中高生のボランティア活動に資金を提供していただけるという情報を得ました。今年度の活動資金は、ほぼ、このNPO法人の援助によります。また、柴田町の有志の方々から活動資金の援助の話があり、ご寄付いただきました。

このように、中学生の善行活動を支援していただける団体や機関に今後も

協力をお願いしていきたいと考えています。

4. 実践事例の実績、実施による効果

○取組の実績

(1) アンケート結果から

今年度の被災地支援活動後に行ったアンケートの結果は以下の通りでした。

(アンケート実施：7月5日、回答数：2学年77名/80名)

質問1：被災地、被災校舎を見学して、津波の恐ろしさを実感したか。

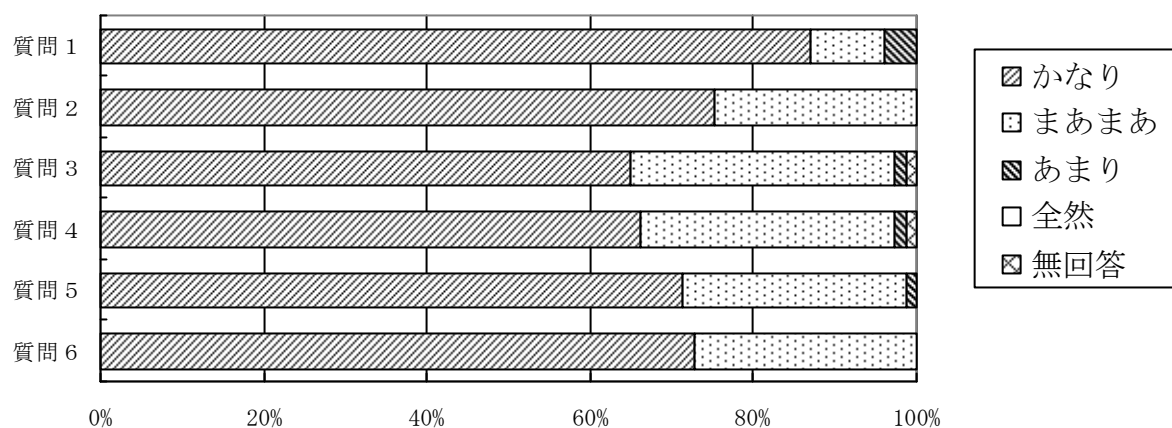
質問2：小学校の先生や被災者の話を聞いて、震災時のようすがよくわかったか。

質問3：ラベンダーをプレゼントして、磯区の方々に喜んでもらえたと思うか。

質問4：窓ふき清掃ボランティアで仮設住宅の方々に喜んでもらえたと思うか。

質問5：自分たちの活動が多くの人に支えられていることがわかったか。

質問6：3V絆プロジェクトに参加して満足したか。



(2) 生徒の感想文から（一部を抜粋）

- ・人の気持ちをもっとわかり、理解できる人になりたいと思いました。
- ・仮設の方々と直接話ができたらよかった。もっと、触れ合う場があるとよい。
- ・窓ふき以上のボランティアもしたかった。もっと、活動時間があるとよい。
- ・中学生ができることは限られているだろうと思いますが、私にしかできないこともきっとあるはずだと思う。
- ・もう一度いろいろな花と一緒に咲かせていきたいと思った。
- ・この東日本大震災のことを次の世代に伝え、受け継いでいこうと思った。
- ・この活動に対してたくさんのお金を寄付してくれた皆さんに感謝したい。
- ・津波にあって亡くなった人たちの分まで、東北人として、生きていきたい。
- ・これからどんなささいなことでもいいので、涙まで流してくれる人の役に立つような生活をしていきたい。
- ・仮設住宅で出会った人々のように力強く生きていきたい。

以上のことから、生徒は被災地域の方々のためになる活動ができたと感じていることがわかります。また、被災地に実際に足を運び、その被害のすさまじさを体感したようです。更に、感想文の分析から、被災地のようすを実際に見聞し、被災された方々と触れ合うことで、体験による達成感を持ったことはもとより、相手の気

持ちを考え、自分にできることを行っていこうとする意識の芽生えが感じられました。

5. 実践事例についての評価

○取組についての評価

本校が被災地支援活動に取り組んで3年が経過しました。この間、生徒の心の中に、他人を思いやる心や人の役に立つ人間になろうという気持ちが芽生えてきていると感じます。未曾有の災害に遭った土地と人々を目の当たりにすることで、同じ宮城県にいながらこれほどまで違うのかという実感をもち、自分たちにできることを考えられる生徒へと成長してほしいと思います。

○保護者や地域住民からの反応

本校PTAや保護者の皆さんからは、「とても素晴らしい活動ですね。ぜひ、続けていってほしいです。」というご意見をいただきました。また、学校評議員会や学校評価委員会の場でも、特色ある教育活動として継続を望む意見をいただいています。支援活動を行った被災地の方々や各所から、感謝の言葉を記した手紙や寄せ書きを多数いただきました。

これまでに、「3V絆プロジェクト」が新聞やテレビのニュースに取り上げられ、報道されていることから、地域からも認められ期待されている活動であると考えられます。

○現在、実施にあたって課題と感じていること

今年度から山元町での被災地支援活動を始め、今後、少なくとも3年間は継続して行っていきたいと考えています。そのためには、活動資金の調達課題の一つとして挙げられます。最近では、震災があったこと自体風化してきているのではないかという話も聞きます。このような状況で、支援をしていただけるかどうか心配なところです。そこで、「3V絆プロジェクト」の内容を理解していただいたうえでの募金活動や自分たちが育てたラベンダーで作ったポプリの販売などで、生徒自ら資金を調達する方法も模索していきたいと思います。

また、仮設住宅の方々もいずれ新しい場所に移り住むであろうと考えられますが、諸事情から転居を余儀なくされている方もおり、お世話していただいた方々との連絡が取れなくなるのも課題と言えます。

その都度、新たな課題は生まれてくるとは思いますが、「3V絆プロジェクト」の趣旨と意義を十分に引き継いで、よりよい活動へと成長させていくことこそ、人権について正しい理解と行動を伴った生徒の育成につながるものと考えます。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

宮城県柴田町立船迫中学校

被災地の学校としての被災地支援活動が、地域の関係諸機関と多様な連携をとりながら組織的・継続的に展開されている点に特色がある。開校当時の生徒会活動スローガン（3V: Vision, Victory, Vitality）を支援プロジェクトの名称に取り入れ、支援活動を一時的な体験にとどめるのではなく、心の教育と防災教育の面から教育課程に位置付けることにより、将来に持続する志として形成しようとしている点が特に注目される。また、被災者のニーズをリサーチし、活動資金の調達をも視野に入れながら、教育委員会、NPO団体、並びに仮設住宅の方々との協働で支援活動に取り組むなど、様々な工夫が行われている。地域の人々からの期待にこたえることを通じて、さらなる社会貢献への意欲を高めていることは、人権教育を通じて社会参加意識を育む道筋を具体的に提示しており、今後、この「3V絆プロジェクト」が、学校教育活動の全体に浸透していく可能性を期待させるものである。